市民研会員から寄せられた

2013 年 私のおすすめ 3 作品

締め切り 2013 年 3 月 10 日、到着順に掲載

● 杉野 実

「私のおすすめ 3 点」、私はいつも 1 年かけてネタを準備するので、年末のこの時期になるともう書きたくてうずうずしています。私のネタはいつも、「自然・社会・人文諸科学から 1 点ずつ」になっていることに、みなさんはお気づきでしょうか。ここ数年「イベント系」のネタが多かったのですけど、今回は本が 3 冊となり、落ち着きをとりもどした感があります。

1 ◆ 古澤 明『「シュレーディンガーの猫」のパラドックスが解けた！』（講談社ブルーバックス）

現代物理学では粒子の状態を「状態×確率のたしあわせ（積分）」で表現するから、「現実にまだ観測されていない粒子」においては、「さまざまな状態が同時に共存している」と考えざるをえない、ということを「猫の生死」で表現してみせたのが表題の逆説ですね。それに相当する状態を光子の集団でつくってみせた著者は、これこそ「猫が生きていると同時に死んでいる状態の再現だ」というのですが、さてどんなもんでしょうか？ 著者自身みとめるように、猫（というより、問題は「毒薬瓶」の方だと、私は思うが）のようなマクロの物体においては、構成粒子の「ゆらぎ」が相殺しあうので、どれか特定の粒子の「ゆらぎ」が全体に影響をおよぼす余地もない。ということは、光子の集団と猫（ないし毒薬瓶）とは「似て非なる」どころか「全然似てない」のであって、「再現」などとはとてもいえないと私は思うのです。こんな基本的なところで専門家がなぜまちがうのか不思議です。みなさんも考えてみては？

2 ◆ ジェイン・マクゴニガル『幸せな未来は「ゲーム」が創る』（早川書房）

まがりなりにも「社会運動の基礎理論」をめざして研究にはげんできた（つもりの）私としては、「社会問題の解決をゲームにして楽しんでしまおう」という著者の姿勢には、良くも悪くも大変挑戦的なものを感じます。まあ私自身はゲームはほとんどプレイしませんが、ゲーマーに偏見もっているわけでもありませんから、「社会運動をゲームに」という発想も特に不愉快だとは思いません。飢餓撲滅や環境保全、地方政治家に関する情報公開、蛋白質の構造研究、さらには患者個人による病気の克服などといった、さまざまな主題がゲーム化されているさまには、たしかに見ているだけで楽しくなるところがあります。「顔に青筋立てる」社会運動家は私も好きではありませんから、社会運動が楽しくたって全然かまわないとも思います。でも思ったんです。現実の社会が「クソゲー」だなんて、ある意味至極当然のことでもあって、それをみとめる度量もまた、運動に従事する者には要求される資質ではないのかなあ、と。

3 ◆ 今柊二『定食と古本』（本の雑誌社）

おかたい話が続きましたからね、最後は純然たる趣味の本を紹介します。友人らを相手にこの本に言及するとき、私がかならず用いるいいまわしがありますから、それをこれから書きますね。最初は定食屋の紹介から始まって、「なんだ結局よくあるグルメガイドか」と思っていると、漫画や映画や音楽やオカルトやエロ本の話が少しずつふえていって、最後は著者の小中高時代に始まる「怒涛の古本人生話」が、読者を唖然とさせたままとおりすぎてゆく……そう、始めから終りまで「通しで」読んでこそその本当のすごさがわかる、ビートルズやピンク・フロイドのコンセプトアルバムみたいな本だ！ 市民研という場ではどうかと思うけど、あえて書いちゃいます。冒頭の定食屋紹介、文体が、スポーツ新聞の風俗探訪記事ににています！ いまの読んでニヤリとした方、是非読んでみてください、期待は裏切られませんから。でも本気でエロいの期待すると裏切られるかもね。幼稚なのもマジで楽しめる人向きかも。

● 吉岡 寛二

昨年に引き続いて、三つとも社会科学系です。
①原発関係の本
②日本史・世界史関係の本
③平和関係の展示館

◆1 武田徹『私たちはこうして「原発大国」を選んだ―増補版「核」論』（中公新書ラクレ）

この本は、2011 年 3 月に福島原発事故があったために、2011 年 5 月に増補版として出されたものです。政治的・社会的側面から日本における原発の歴史が、書かれていて秀逸です。日本は、「地震国だから欧米とは比べ物にならないくらいに事故の危険性が高い」とか「地震国であり廃棄物を埋める場所も存在しない」とかいう理由は、日本政府には通らないのかもしれません。敗戦直後、日本は生き残るために「戦勝国である米国の無差別殺人、すなわち東京大空襲も広島・長崎原爆投下も政府は一切非難しない」と決めたときから、「米国と一緒に原発を推進している」のであり、独自で考えることを放棄している限り無理なのかも？

小泉さんには期待しているのですが、都知事選は負けてしまいました……。安倍首相が「前のめり」なのが気がかりです。

ついでながら、太平洋戦争へ突入する時の首相から、最近の首相に至るまで、米国との関係について書かれている、**田原総一朗『ホントはこうだった日本現代史①～③』（ポプラ社）**という本も参考になりました。

あるいは、市民研 ML のメンバーである森川さんが 10/10 のメールで紹介されていた、**日野行介『福島原発事故県民健康管理調査の闇』（岩波新書）**というのも、興味深い（？）一面があります。
国民におもねるマスコミは、「東電が悪い」「政府が悪い」「御用学者が悪い」とはいうけれど、「地元自治体」が地元民に対して「隠そう、隠そう」としていることが書かれています。

◆２ 竹田恒泰『日本人はなぜ日本のことを知らないのか』（ＰＨＰ新書）

著者は、明治天皇の玄孫（やしゃご）ということですから、皇室を日本民族の精神的柱だと主張しているのは当然といえます。しかし、そういう点をすべて差し引いたとしても、的を得た意見が書かれていると思います。（東京では放送されていない）「たかじんのそこまで言って委員会」のレギュラーとして出演されており、その意見には賛成するところが多いです。私自身、小学・中学・高校教育では「日本がいかにすばらしい国か」ということを教わらなかったし、愛国心というものも否定されていたような……30 代以降になってから、そういうことに気がついたのですが、東日本大震災・福島原発事故・尖閣列島問題・竹島問題など知れば知るほどそれを痛感します。先日、パリに旅行したのですが、「日本に生まれ、日本で生活していて良かった」と再認識しました。

一方で世界史を学ぶには、クリストファー・ロイド『137 億年の物語　宇宙が始まってから今日までの全歴史』（文藝春秋）というのがいいかも？ 分厚くて高い本ですが、鞄にいれて電車で読むために、カッターとガムテープで 4 分冊にしました。4 部構成で全 42 章ですが、38～41 章の近世・近代は、いい視点で書けていると思います。

◆３ 鹿児島県南九州市知覧町「知覧特攻平和会館」

鹿児島県の「知覧特攻平和会館」はとてもよかった。ビデオ上映は 30 分もあるので殆どの人はパスするようですが、涙なしには見ることができませんでした。鹿児島を旅行されるという方は、必見です。「2013 年のおすすめ」ということで、(11 月に行ったので)これにしました。

平和資料館というのは全国のいたるところにあるようですが、有名どころの「広島」や「沖縄」は、私も訪れたことがあります。特に、沖縄南部にある「数多くの平和祈念碑・各種施設」からは、沖縄戦のことがありありと伝わってきます。本州からは遠いし、たくさんの記念碑・施設があるのですが、「戦争を繰り返してはならない」という思いを強くします。

一方、東京二十三区内にあるにもかかわらず、東京にお住まいの方にあまり知られていない場所があります。新宿にある平和祈念展示資料館と、靖国神社内にある遊就館の 2 つです。市民研ＭＬには東京の方が多いので、時間があるときに一度訪問されることをお奨めします。平和祈念展示資料館は「シベリア抑留」に関する資料館です。

なお、遊就館は「平和祈念」ではなく「わが国の軍事博物館」であり、「安倍首相が靖国神社を公式参拝することの違和感」を理解できると思います。

● 橋本 正明

1◆ 藻谷浩介／ＮＨＫ広島取材班『里山資本主義』（角川書店）

私は「縮小社会研究会」に参加しているが、自分が考えている社会はどう在るべきかのイメージの半分は此処にあった。これは単に地方経済の再生を語った書ではない。少子高齢化やエネルギー問題や、原発に頼らずに自立する社会の在り方のヒントを示す刮目の書である。

真庭市や庄原市の里山に生きる人々の生き生きとした表情、高齢者と子供たちの触れ合いについて読み進むにつれ、感動の涙が浮かぶのを禁じ得なかった。私は大学で経済学を学んだが、こんな経済の書は初めて読んだ。

2◆ アイリーン　ウェルサム著／渡辺　正訳『プルトニウム　ファイル』（翔泳社）

国策の名の元に非人道的なプルトニウム注射や放射線全身照射等の人体実験を、何も知らされない兵士や一般市民、囚人を使い行われた国家の暗部を告発した書。しかもこれはナチスではなく、民主国家であるはずのアメリカで９０年代に明らかにされるまで実行、隠蔽されて来た歴史の真実であることに畏怖の念を感じざるを得ない。その中にある「核実験や放射能漏れ、原発事故のたびに政府が出す無害・安全宣言はあやしい…、と国民がうすうす感じていた、その予感が裏書されたところだ」の下りは現在の日本にもまさにピタリと当てはまる。

3◆（株）エネルギーフォーラム『月刊エネルギーフォーラム』

昭和 30 年創刊の電力・ガス業界紙。記事の約 3 分の 2 を占める電力業界側は 3.１１以降も執拗に原発の再稼動の必要性を主張し続けている。30 年経過の火力発電施設を「老朽火力」としてリプレースの必要を訴える一方で、原発については 40 年経過のものでも「安全」として再稼動を主張している。また、原発廃止派の意見は「感情的で矛盾している」と言うが、何らその根拠は示さないか、示しても意味不明。唯一の救いはガス業界側の記事であろうか。2014 年 2 月現在、通算 710 号の驚愕の書である。

● 石坂 信之

1◆ 石川拓治「奇跡のリンゴ」（幻冬社）2008 年 7 月

2013 年夏に東宝から配給された映画「奇跡のリンゴ」（中村義洋監督、阿部サダオ主演）を覚えてられる方もおられるのではないかと思います。本書は、映画作りのきっかけとなった 2006 年ＮＨＫで放映された「プロフェッショナル仕事の流儀」で取材したものを構成したといわれています。

「奇跡のリンゴ」のあらすじは次のようなものです。岩木町（青森県）でリンゴ農家に婿養子入りした木村秋則さんは、リンゴ栽培に不可欠といわれた農薬散布の度に嫁の体に異変が生じることから減農

薬栽培をはじめ、やがて無農薬栽培に挑戦します。しかし、病気や虫害によって失敗に次ぐ失敗を重ね、リンゴが稔らない年月が過ぎて行きます。周囲や親戚から孤立し、生活は困窮の一途をたどり、リンゴが稔らない６年目のある日、自殺するために森に入った時にドングリの木に出会うのです。肥料も農薬もない森のドングリが病気にもならず、虫にも食われずに林立していて、ドングリの木の足下はふくよかな土に覆われていることから、「土こそが肝心」なことを悟るのです。その後、土作りに全力を注いだ９年目の春に初めてリンゴの花が咲き、今まで味わったことがないおいしいリンゴができたというのです。

映画は 2013 年の夏にヒットしました。その前ぶりとなった「プロフェッショナル仕事の流儀」（ＮＨＫの番組は見ていなかったのですが……）の取材をまとめたような石川拓治「奇跡のリンゴ」の本をとりあげましたが、「奇跡のリンゴ」にかかわる木村秋則さん自身の本もあります。リンゴに限らず、無肥料、無農薬栽培の苦労というのはたいへんなものがあるわけです。気楽に読めるこの本で生産者のご苦労の一端を知ることができるのではないかと思っています。

２◆ 一坂太郎「司馬遼太郎が描かなかった幕末」（集英社新書）2013 年 9 月

司馬遼太郎は世の中の偉人を、より格好良く、ストーリ展開よろしく書くので読者に鮮烈な印象を与え、英雄にまつりあげます。一坂太郎は幕末の史実を調べ、司馬遼太郎が描いた小説の英雄を、残っている資料から検証します。

本来、小説ですから史実と違って良いのですが、司馬遼太郎という小説家は、小説の中であたかも＜裏付け資料がある＞がごとく話を取り付ける癖があります。また、＜司馬遼太郎が考えたこと＞が随所に挿入される特色があります。そういう小説なのだからそれで良い、とする方もおられるかもしれませんが、困ったことにドラマや映画の制作者、さらには日本の経営者や政治家が、司馬遼太郎の小説を史実と思いこんでいる節があります。例えば「竜馬がゆく」の中で新政権の人事案を練る場面で、“龍馬が示した案に龍馬の名前がないこと”を取り上げ、“古来、革命の功労者で新国家の元勲にならなかった者はいないであろう”と型破りで強烈なイメージを龍馬というキャラクターに与えています。しかし、史実（龍馬とともに新政権の人事案を練った戸田雅楽の回顧談）によると、新政権の人事案として参議に坂本龍馬の名が書いてあったので「坂本之を見て手を拍って大いに喜んで曰く、是れ今日行ふべし」というのです。

これ以降は私感ですが、代は変わって明治に至り、やはり英雄を扱った「坂の上の雲」なども同じと思っています。明治の日本のように“強い指導者が国を導いていく必要がある”ということに収束する思想、政権や首長がすべてをとりしきっていく思想につながることがないように願っています。

３◆ 天野祐吉「成長から成熟へ」（集英社新書）2013 年 11 月

天野祐吉さんは、この本が出る前の 10 月に亡くなっています。この本は、天野さんの広告批評を通して、文明史観ともいうべき内容を持っています。

第１章の「計画的廃品化のうらおもて」では、技術に裏打ちされていたヘンリー・フォード社のＡ型フォードがゼネラル・モーターズのデザインと広告戦略に破れていく様子はなかなか説得力があります。

７０年代から８０年代には「欲望の計画的廃品化」であり、「センスの差異化」です。化粧品を例にとると、資生堂とカネボウのどちらのやり方がうまいかによって、どちらの商品が多く売れるのかの差が出たそうです。資生堂の「ゆれる、まなざし」とカネボウの「黒い瞳はお好き？」のどちらがあなたのセンスにピッタリなのでしょうか？

我が国の政府の広告のうち、最たるものは原発の推進広告です。1977 年のスリーマイル島の事故の後、電気事業連合会、電力会社および政府が莫大な金を使って原発の推進広告をしたのです。このような広告は行政広報ではなく、意見広告です。原発の推進広告に対抗するのは金額的にたいへんです。ちなみに、アメリカでは「意見広告には無料で反論する権利がある」そうですが、アメリカ政府は行政広報をすることはあっても意見広告を出すことはないんだそうです。

天野さんは“あとがき”で＜……いまはもう経済成長なんかにしがみついているときじゃない。原発の輸出で食いつなごうなんてことじゃなく、文明の書き換え作業にしっかり取りかかるときなんじゃないでしょうか。そう、引っ越しです。引っ越し先は、言うまでもありません。経済力や軍事力で競い合うような国じゃない。文化力を大切にする「別品」の国です。＞と言われています。天野さんのこの言葉を受け止めたいと思っています。

● 網代 太郎

「私のおすすめ 3 作品」に初挑戦です。おそらく他の人が薦めないだろうものを選びました。

1◆（本）　飯田真弓「税務署は見ている。」日本経済新聞出版社

初級国家公務員（税務職）女子 1 期生だった著者が、税務調査の実態など、税務署の仕事をご自分の経験をベースに語っています。自分が知らない仕事について知るのは、とても興味深いです。特に自営業者、会社経営者は、自分の税務調査対策として必読では。読みやすく、忙しい方でもスンナリ読めると思います。

2◆（映画）　「きっと、うまくいく」

インドの苛烈な競争社会を背景にしていますが、娯楽映画として、とても楽しめました。内容ギッチリでお得感もあります。

3◆（楽曲）　ＡＫＢ４８「恋するフォーチュンクッキー」

娘の保育園の謝恩会で踊ることになり、ＡＫＢの歌を、初めてじっくりと聞きました。楽曲としては何の新鮮味もありませんが、音楽に合わせて踊ること自体（普段はなかなかやる機会がありませんが）やっぱり楽しいものですねという意味でのおすすめ。

● 内山 治樹

1◆ コンサート

J・S・バッハ「ブランデンブルグ協奏曲全曲演奏会」

昨年は聴きたいコンサートの日程が多忙と重なることが多く、機会そのものがありませんでした。ということで、2014 年のコンサートになってしまうことをお許し下さい。

まずは、本年 2 月 12 日（水）東京オペラシティコンサートホールで開催されたフライブルグ・バロック・オーケストラによる、バッハのブランデンブルグ協奏曲 1～6 番全曲演奏会です。

一見、何ら珍しい企画でないように思われるかもしれませんが、実はとんでもなく貴重な機会な訳で、これを実現するのには、相当のロスを覚悟で行わなければなりません。6 曲全てがソロ楽器が異なります、中にはトランペットやホルンやフルートのように 1 曲だけにしか登場しない楽器もある訳で、当然ですが、その効率性からも最低限の人数で演奏されました、99%が古楽器によるもので（第 2 番のトランペットだけが大型のバルブ付の現代仕様のものでした）、その響きの軟らかさもさることながら、作曲された当時の在り方も体感することができました。本場のソリストの演奏がその機会の希少さを、より極めてくれました。

ペーター＝ルーカス・グラーフ「フルート演奏会」

機会の貴重さというものを、別側面からさらに思い知らせてくれたのが、3 月 1 日（土）に昭和音楽大学ユリホールで開催された、ペーター＝ルーカス・グラーフによるフルート演奏会でした。現在 85 歳の世界のトップクラス のマエストロの演奏が何と大学の小ホール、全席自由で 2800 円という価格で聴けるという希に見る企画です。

何とアンコールに 6 回も応えてくれ、内 2 つが当日目的の一つだったバッハのソナタの単楽章演奏で、求道者とも評される巨匠だからこその到達点を直感でき、素直に胸が熱くなりました。ああいう感動は今まで一度もありませんでした。楽器の特性上ずっと立ちっぱなしです。身体も演奏も闊達の一語に尽きました。

2◆ 映画

「ピアノマニア」2009 年
（オーストリア・ドイツ合作、リリアン・フランク・ロベルト・シビス監督　97 分

何よりも驚嘆を持って一気に鑑賞できてしまったのが、ピアノ調律師とピアニストの飽くなき楽器に対する拘り（執着と言っても良し）を描いた「ピアノマニア」でしょう。そりゃハリウッドの娯楽作品にも面白いのは沢山ありましたが、でも現実は小説より奇なり？　現実がここまで虚構のように思えた作品は、私が昨年巡り会えた中ではこの作品だけでした。

タバコやワインやウイスキーのブレンダーの方がいらして、その方々を巡る実態については、TV や書籍で今まで何度か触れたことがありますが、いつもながらあの感覚の鋭敏さには驚きますが、その楽器バージョンといえば良いのか、とにかく恐ろしいところにまで拘りぬき、ここまでやるか！というところにまで入り込むその執念には恐れ入りました。登場するピアニストはアルフレッド・ブレンデルを始め一流のマエストロばかり、そういう視点からも楽しめる作品になっています。「世界的な」という肩書きは伊達じゃないんでしょう…。とにかく驚きますよ。

「ガリレオ」シリーズ　フジテレビ

日本版「フリンジ」とも呼べる「ガリレオ」シリーズも面白く、日本にしては頑張っているなと思えた TV 映画作品だと思います。

3◆ 書籍

「炭水化物が人類を滅ぼす」夏井睦著　光文社新書　￥924

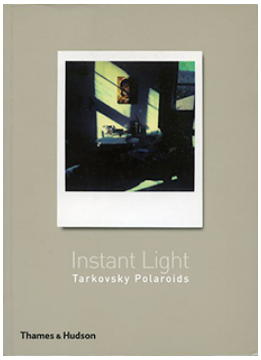
私事ですが、飲んだり食べたりが大好きです。いつまでも若いつもりで好き勝手やっていた結果、昨年の健診の結果は今までの最悪の数値。完全な成人病予備軍通知を受けてしまいました。真っ黄色のカードを受け取ってしまった訳です。

ということで己の身体に対しての再検討、再認識を余儀なくされて、いろいろと考えあぐねている時に、偶然巡り会った新刊本が「炭水化物が人類を滅ぼす」でした。タイトルからも興味を引かれ、好奇心から購入。読んでびっくり。従来の健康維持として信じられていたジンクスが、一気に裏返るかのような、それでいて、客観的で現実的で納得の行く説が為されているではありませんか。

著者自身も酒飲みで、食べることが大好き。体重も 70 キロの大台に差し掛かった頃に始めた糖質制限という新しい視点からの制限法で、半年で 11 キロ痩せたという事実から、己の経験を基にさほど苦しまずに、保健所で配布されているニュアルとは全く違った方法で減量ができるということを、分かりやすく述べてくれています。

他ならぬ私も今年の七草から、運動不足解消のための軽い運動と同時に中程度の糖質制限を実施したところ、74 キロだった体重が、3 月 4 日現在で 68 キロにまで落ちてきています。さらに数キロ落し、今年は堂々と健診に向うつもりです。

「Instant Light（Tarkovsky Polaroids）」Thames & Hudson 2004



そして、新作ではありませんが、バッハ、ダ・ヴィンチと並んで、生涯影響を受け続けるであろうロシア映画監督の、故アンドレイ・タルコフスキーが残した写真集の「インスタント・ライト」（国内未発表、発注から 2 ヶ月かかり届きました）。

タルコフスキー自身が映画で使用できそうなシーンを、ポラロイドカメラで切り取った写真が淡々と並んでいるだけなのですが、彼独自の美学がここにも濃厚に表現されていて、私自身の限定書籍が一つ増えました。

● 白井 基夫

1◆ 水野 玲子（著）『新農薬ネオニコチノイドが日本を脅かす――もうひとつの安全神話』
七つ森書館、1890 円

世界では、ミツバチの大量死や全滅の原因といわれる、ネオニコチノイド。欧米では使用禁止、あるいは使用基準が厳格化されるなか、日本では緩和されている。発達障害や神経難病の増加と関係がありそうだ。さかんに報道される PM2.5 の裏で何が起きているのか。これも「目に見えない脅威」であり、放射能問題と共通する。

2◆ 児玉 真美（著）『死の自己決定権のゆくえ----尊厳死・「無益な治療」論・臓器移植 』
大月書店、1890 円

安楽死や自殺幇助がどんどん合法化されている。いのちそのものまで、新自由主義の波にのみ込まれている現実を知る。よい死とは何か、ということについて抽象的に語る時代は終わっている。臓器移植は、すぐそこにある問題だ。第 3 章にある「重症心身障害当事者の親として」だけでも読んでほしいと思う。

3◆ 津田 篤太郎＋森 まゆみ（著）『未来の漢方――ユニバースとコスモスの医学』
亜紀書房、1680 円

東洋医学と西洋医学の比較、日本の医療の歴史（そのなかでも江戸期にはいっそう踏み込んでいる）などを語るなかで、文学、落語、錬金術、放射線被ばく、セックスレスの話まで飛び出すスリリングな対

話。巻末に「漢方をめぐる歴史年表」という 3 ページ分の資料がさりげなく入っているが、結構、貴重なデータかもしれない。

番外◆ 田中ひかる『生理用品の社会史――タブーから一大ビジネスへ』（ミネルヴァ書房）

編集者としては、こういう企画を持っている人に出会いたいと思う。日本ではなぜ、長い間、生理用品が進化しなかったのか、という疑問を出発点にしている。章立て＝「ナプキン以前の経血処置」「月経タブーの歴史」「使い捨てナプキンの登場」「今日の生理用品」。約 50 点のアンネ社広告資料などを収録。社会の変化と民衆意識の変化の関係を読み解く試み。

番外◆ドニゼッティ（作曲）　歌劇『アンナ・ボレーナ』全曲
ジェノヴェーゼ演出　ピド＆ウィーン国立歌劇場（2011 年）　Blu-ray Disc（輸入盤）

2011 年の発売だが、昨年はじめて見たので。言わすにはいられない。ネトレプコ（ソプラノ）、ガランチャ（メゾ・ソプラノ）が歌うわ、歌うわ。どこまで歌うのか、とあきれかえるほど。どんな高い音でものびやかに、余裕で歌ってしまうこの両人。また、二重唱がすばらしい。異質なものどうしの美しいマリアージュ。難度が高いため、これまで演奏機会に恵まれなかったなんて、にわかに信じられないほどのテク。さらに、両人、容姿がきわだってよく、服もナイスときた。舞台もシンプルで洗練されている。オケも切れ味と推進力が抜群だし、もう、言うことなしである。名盤！

● 権上 かおる

＜2013 年の忘れられない 3 人の出会い＞

◆ 小笠原厚子さん（青森県大間町・あさこはうす）

大間原発へ 157 人中、最大 2 億円を積まれてもたったひとり土地を売らなかった故熊谷あさ子さんの長女。お母さんの遺志を継ぎ、大間原発建設地のすぐ横に建つ「あさこはうす」を守る。なぜお母さんはそこまで頑張れたのかを伺うと「一日でも完成が延びればいいんだ。そうすれば社会が変わるかもしれない」と、おっしゃったそうだ。福島事故により、その通りの社会変化は起こり、今や対岸の函館市が原発反対を正式に表明している。電気・水道はもちろん沢水も上流で止められ、用水すらなく、鉄条網でかこまれた生活は想像以上に厳しいに違いない。しかし、厚子さんの輝く笑顔とともに語られる「動物を飼い、子どもたちの遊べる場所にしたい」は、ドイツではフル MOX をやめて、遊園地になっている例があるのだから、次の現実となるかもしれない。そして、厚子さんのご長女さんもお母さんを支えていることも心強い。

◆ 木村眞三さん（獨協大学）

短い時間ではあったが、お話を聞く機会があった。月に一度ライフワークのウクライナ調査にでかけ、のこりは、福島での調査や食品検査の機器の普及に努めておられる。時には農家に泊まり込みで。３．１１で放医研をただちに辞職。NHK のＥテレで‘ネットワークで作る放射線地図’の調査で飯舘の汚染を明らかにされたことは、記憶に新しい。「続編はいつですか」の質問に「もう、責任持てないので、断わりました」のお返事。聞くところによると、JCO の東海村事故のとき入所、対応の最前線の経験がもとになり、福島事故でのご自身の対応の基礎になっているとのこと。これからますます大きくなると予想される‘隠ぺい・詭弁・脅迫’の原発事故対応に対して、なくてはならない方と感じた。

◆ Ｋさん（山口県在住、女性・70 代）

彼女とは 10 年以上のお付き合いが、手紙や電話ではあった。しかし、昨年初めてお会いできた。瀬戸内海に面した山の中腹にあるご自宅からの海の眺めは美しい。しかし、内湾の奥にコンビナートがつくられ、産廃残土も埋め立てに使われたという。目の前の魚や海草はもう食べられないと嘆く。当地では白菜漬けは、海水で洗ってから漬けこむのだそう。そのような処理をした漬けものをいただいたら、油臭くて食べられなかったそう。「海は汚れている」を地域で口にすると、地域の長から「痛い目にあわせる」と再三電話があったそうだ。「さすがに『命が危ない』とは言わなかった。地域の集まりで顔を合わせるとき、晒しを幾重にもまき、身を守ってのぞんだ」と言われた。美しい風景と対照的なお話に息をのんだ。

● 井上 駿

1◆　秋桜(コスモス)の伝言　宮坂潤子著　光陽出版社　1995

戦前、反戦運動に入っていった学生が特高警察につかまり、拷問の挙句自宅に帰されたものの衰弱死した。その妹が著者で、当時の活動家の置かれた状況、家庭の状況など実感豊に偲ばれる。

2◆　戦後史の正体　孫崎享著　創元社　2012

戦後日本政界がいかに完璧にアメリカの支配下に置かれていたか。歴代総理大臣のうち、多少なりともアメリカからの独立を企てた総理大臣は様々な策謀でその座を追われた。

3◆　原発メルトダウンへの道　NHK ETV 特集取材班　新潮社 2013

原発導入に極めて慎重だった電力会社も、正力松太郎の強引な手腕によって原発導入に引きずり込まれていく。動きが始まると商機を逸してはならないとの商社のイニシアティブが動きを加速する。技術者が危ないと思った点も「キー・ターン方式」という一括丸投げ型の契約のためにいかなる変更も経済性先のために許されなかった。

● 秋山 和男

今年も市民科学研究室の関連した情報と結びつけて書きます。

市民科学研究室会員の森川浩司氏がＭＬ上で紹介する「新刊ピックアップ」の書籍と関連して、原子核・原子（元素）・分子の中の力と機能について、私が学び、理解し、広がっていったことを書いて、特に 10 代の子どもたちにそれらの本をおすすめしたい。

紹介のあった

1◆『科学をいまどう語るか――啓蒙から批評へ』（尾関章著　岩波現代全書　2013）

2◆『元素戦略――科学と産業に革命を起こす現代の錬金術』（中山智弘著　ダイヤモンド社　2013）

と関連させて

3◆『課題設定の思考力』（東大ＥＭＰ・横山禎徳編　東京大学出版会　2012）

のあわせて 3 冊です。

紹介のあった**『科学をいまどう語るか』**には、湯川秀樹の中間子論に触れていて、その最大の意義を、「中間子という新しい素粒子の存在を予言したことにあるのではない。自然界の力は重力と電磁力の二つだけではないことを示した点にある。原子核の中に量子力学をもち込んで、陽子や中性子を束ねる力として、重力でも電磁力でもない新種の力を想定したのである」と（46 頁）。この「『新しい力』が束ねる原子核を分裂させたときに解放されるのが、原子力エネルギーだ」（127-128 頁）。

このことをもう少し分かりやすく説明しているのが、**『課題設定の思考力』**の酒井邦嘉氏「『何を』よりも『どのように』という問題意識」と題するものである。

「たとえば、湯川秀樹の中間子にしても、当時の風潮としては、電子と陽子と中性子が出てくればもう十分で、中間子なんて余分なものは要らないと思われていました。そのなかでやはり中間子は非常に重要だと、湯川先生はその考えを捨てなかった。陽子と中性子という、電気的にも万有引力でも結びつかない二つのものが結びつくためには、必ず何か媒介する粒子があるだろうと考えたのです。その信念をもとに計算してみると、電子の 200 倍くらいの重さを待った粒子が存在するのではないかという結論に達する。そうやって湯川先生は自分の仮説に基づく解釈を自然界に与えたわけです。

……その後π（パイ）中間子が見つかり予言どおりだったことが明らかになります。

それが核力を媒介している中間子だとみなが納得し、その後も中間子のような性質を持つ粒子がたくさん見つかってきたわけですね。湯川先生は、見えない部分に自分の直感で論理を超えるような発想で突き進んで、こういうことが自然界には起こっているかもしれないということを理論的に提案していきました。こうしたプロセスこそ大切であるということを、私は物理学から学んだんです」（214-215 頁）。

昨年学習支援ボランティアで中学 3 年理科の【物質】の 1 章「化学変化とイオン」を教えることになった。その教科書での記述順序は「①どのような水溶液が電流を通すか」「②水溶液の電気分解を調べよう」「③電解質は水溶液中でどのような粒子になっているのか」（この③で「原子」「イオン」「イオン式」「電離」を学ぶ）「④電池のしくみ」。2 章「酸・アルカリと塩」の順で、発展教材として「細胞内では

たらくイオン」があった。

平成 24 年度の新学習指導要領の学習内容に「水溶液とイオン」が新たに加わった。新指導要領の改善方針は、実社会・実生活との関連と、目的意識をもった観察、実験を行うことが重視されている。結果、「物質」の学習に「電解質」「電池のしくみ」「酸とアルカリ」などが取り組める「イオン」が選ばれたと考える。さて、このようにして学んだ後で、生徒に「物質とは何か」と質問したら、どのように答えるだろう。ある生徒は「イオンからできている」と。また「原子からできている」（これは、教科書の記載に「水溶液中で、銅や塩素は電気を帯びていることを学んだ。物質をつくる原子がどのように変化したのだろうか」とあるからだ。いや、学習したことから「物質とは」を自信をもって答えられないのではないか。

だから、「物質とは何か」を理解させる上で、物質は元素の原子が組み合わせでできていて、その組み合わせは、イオンのような結合の仕方のほかにも次のものがある、と加えた方がよいだろう。

> ただ一種の元素が複数集まってできている「単体」と、他の元素と結合してつくる「化合物」がある。その主な結合の仕方に、共有結合、イオン結合（荷電原子間の静電引力による結合）、金属結合などがある。共有結合とは、単結合、二重結合があり、2 個の原子が電子を共有した結合である。また、体内のタンパク質のように原子（分子）が共有結合している部分と、水素結合やファンデルワールス結合のような非共有結合をしている部分をもつなど、物質には様々な結合の仕方がある。
>
> 非共有結合であるイオン結合は真空中と水中の結合強度が異なり、水の中では結合強度が弱いので、水の中で分離しやすい。
>
> 一方、「典型的な共有結合を切るには熱エネルギーの 100 倍以上が必要なので、共有結合が熱運動で切れることはなく、……細胞の中では酵素という……触媒によって制御されている。非共有結合は一般に共有結合よりはるかに（結合強度が：引用者補）弱いが、……細胞内で分子が働くために集合したり離れたりする必要がある場合には、重要な役割を果たす。」
>
> （**『Essential 細胞生物学 原書第 3 版』**(Bruce Alberts, Dennis Bray 他著 2011 年 42,44,46-48,64,76-77 頁)。

ここで感じたことの**まとめ、1 つ目**。実社会・実生活との関連や観察、実験を行うことが重視されることはよいとしても、そのこだわりが逆に、「目に見えない世界」を語ったり、子どもに想像させ、考えさせることから、また物事の全体像をつかむことから遠ざけてしまっていないか。

先に登場した酒井邦嘉氏は、アインシュタインの 4 、5 歳の頃の出来事をこう紹介している。「父親から磁気コンパスを見せてもらったときの衝撃的な体験……。手にした方位磁針がいつも北を示すのを見て、物事の背後には見えない力が働く世界があると思い、そのことが不思議でたまらなくなったというのです」(**『課題設定の思考力』** 220 頁)。

2 つ目。原子・分子の結合の力について、共有結合と非共有結合からみたり。原子核の中の力もみたりした。この力について、リサ・ランドールの「スケール」という概念から見るのは面白い。

「スケールという概念は、物理学者がある特定の研究をするときに、それに関連する大きさやエネルギーの範囲を示してくれるものだが、これは科学の進歩を理解するうえでも、そしてこの世界のさまざまな側面にとっても非常に重要な概念である」。「あるスケールにはよく当てはまる考え方と、別のスケ

ールで役に立つ考え方とを、正しく認識して使い分けなくてはならない」。「科学に関することであろうがなかろうが、スケールによる区別が私たちの考え方を明確にするのにとても役立つこと、そして、私たちの日常生活レベルの距離スケールにおいては、物質の構成要素の微妙な特性がとても見えにくくなる」と述べている（**『宇宙の扉をノックする』**　向山信治監訳　塩原通緒訳　ＮＨＫ出版　2013 年 29-30 頁）。

次に**『元素戦略』**についてその記述にあった一つの例を挙げれば、北川宏氏が原子番号 45 のロジウムと、原子番号 47 の銀を、「原子の配置をナノレベルまで考えて混ぜ合わせる技術を開発したところ、周期表でちょうど二つの元素の間に位置するパラジウム（原子番号 46）の機能をもった、まったく新しい物質ができたのだ。もちろん、これはパラジウムそのもの（パラジウムの単体）ではない。できたのは化合物である。しかし、パラジウムの機能をもっている」（22-24 頁）。

「元素戦略」に関する、細野秀雄氏の次の指摘が面白い。「『元素と機能』の関係だ。元素は一つの機能しかないわけではないのだが、研究者というのはどうしても、元素ごと固定的なイメージ（１元素＝１機能）をもちがちだ。『機能』と『元素』とは『構造』を媒介にして結ばれるが、この『構造』にはナノ構造、界面、欠陥などの性質があるし、『元素』のほうもサイズ、軌道、電荷、スピンなど、いろいろな自由度がある。元素と機能とを１対１の直線的な関係として捉えるのではな」いところに元素戦略関連のプロジェクト研究の根幹があるという（46-48 頁）。

一方で、家泰弘氏「根源的かつ論理的に理解する精神」（**『課題設定の思考力』**）では、

「あらゆる物質は原子からできていて、世の中には１００種類あまりの元素がある。物質はこの元素をいろいろ組み合わせてできているのであり、その組み合わせはほとんど無限と言っていいくらいで、それだけの物質があるわけです。化学の分野でその存在が知られている物質は実に多い。しかし、物質としては知られていても、それが実際にどのような性質を示すかということがわからない、あるいは完全には調べられていないものはごまんとあるんですよ。ですから、調べていくうちに、あるとき宝の鉱脈に当たることもある。

そのよい例が超伝導体の MgB_2（二ホウ化マグネシウム）ですね。これは二つのホウ素とマグネシウムからできたごく単純な物質で、当然ながらよく知られていました。ところが調べていくと、この物質がなんと絶対温度 40Ｋで超伝導になることがわかったんです。これからも驚くべき性質を待った物質が見つかる可能性は広がっています。一つの物質でも、温度、圧力、磁場などのさまざまな環境を変えることで、まったく異なる性質を見せる場合がある。物質のなかでいったい何が起こっているのか、その理解を深めていくことに興味は尽きませんね」（168-170 頁）。

中高校生、大学生が読んでも面白い話と、こんな研究がしたいと考える若者がきっと増えるにちがいない。このような物質についての理解を広げさせてくれたひとつのきっかけが、新刊ピックアップでもあります。その意味でも紹介ありがとうございました。

最後に、市民科学研究室・設立 20 周年記念シンポジウム「豊かな地域をつくる～『消費』と『所有』を超えて、科学・技術を生かすために～」のシンポジウムと関連させて。

シンポジウムでの上田昌文氏の話はゆっくり聞きたかった。後日、その内容を丁寧に知るために市民科学研究室ＨＰから「地域でできることから考える （上田昌文)」を読んだ。中には「『子ども料理科学』を出発点にした『食・農・医・住・ものづくり・エネルギー』の総合科学教育を地域で実現する。食から物理・化学・生物・医学（健康)・環境科学の基本を学ぶプログラムを構築すべきだろう」などがあって、子どもや中高校生、いや大学生や大人にも魅力的なプランが書かれていた。

私が、**『課題設定の思考力』**を手にした理由は、特に 10 代の子どもたちに自己の学び・行動する課題を、社会の課題を解決するために学ぶその課題を、それぞれの子どもたちにどのように育むか、そのヒントを得たかったからだ。上田昌文氏の上の記述にあるように市民科学研究室の活動にも、そんな課題のヒントを得ることができます。ありがたいです。

● 上田 昌文

今回の「私のおすすめ　3 作品」は、これまでとちょっと趣向を変えて、3 つの異なった動機や契機に応じる作品を取り上げてみる。ひとつは、まったく肩の凝らない、しかも大いに笑いを誘う読み物である、独創的な 4 人のエッセイストたちの作品。次は、私が常々考えている「よい手引き、入門書とはどんなもののことだろう」という関心に呼応するいくつかの作品。そして最後は、昨年 10 月に亡くなった、日本を代表する作曲家三善晃氏を悼んでの、彼の作品の紹介。この 3 つである。

1◆ 米原万里、中島らも、ナンシー関、南伸坊のいくつかの作品

（以下に紹介しているすべての作品は文庫などで簡単に手に入ります。出版社名と発行年は省略しました。）

私が思うに、ここに名前を挙げた人々は、人を笑わせるツボを心得た、現代日本のエッセイストの四天王である。

ロシア語同時通訳者として高名だった米原万里（2006 年没）のいくつかの作品（スターリン独裁下のすさまじい世相を扱いつつも無類に面白く感動的な国際小説**『オリガ・モリソヴナの反語法』**や、よくぞネタが尽きることなく続けられたものだと感心する**『発明マニア』**など）は以前に単行本で読んでいて、ずっと気になってはいたのだが、たまたま手にした**『ユリイカ 特集：米原万里』**(2009 年 1 月号）でこの人の筋の通った多面性とでもいうべき特質を知り、100 円で手に入る古本の文庫本を手始めに―幸い著書のほとんど全部が文庫本になっている―古書をせっせと収集してほぼ全部を読み終えた。**『パンツの面目 ふんどしの沽券』『必笑小咄のテクニック』『他諺の空似 ことわざ人類学』**でわかるように、文化人類学的好奇心がとことん発揮されての、言葉や事物（いわゆる「下ネタ」もその主要な対象）の由来に対するこだわりは半端でない。**『打ちのめされるようなすごい本』**という書評集にも同種の徹底ぶりが感じられる。読むたびに、いまさらながらに、ほんとに惜しい人をなくしたとの感を強くする。

中島らも（2004 年没）は、1987 年から朝日新聞に連載された**『中島らもの明るい悩み相談室』**でブレイクした人。新興宗教やオカルトなどとの対決を冒険譚に仕立てた、これまた無類に面白い小説**『ガダ**

ラの豚』を読んで気になっていた作家だった。2013 年に**『異人伝 中島らものやり口』**という事故死する直前（2 ヶ月前）の著書である自伝を読んだが、「死ぬのは別に怖くないな……」とボソッと言って、それがまったく虚勢でないことが伝わってくるような、空恐ろしさがこの本にはある。薬物中毒・アルコール中毒である自分をそのまま世間に晒して笑いのめすことのできる、自分で自分をとことん突き放してしまえるような、吹っ切れてしまった感じ―これがこの作家の魅力の源泉だろう。著書のほとんどは文庫本の古書で手に入るが、**『頭の中がカユいんだ』『とほほのほ』『僕にはわからない』『変！！』『なにわのアホぢから』『ビジネス・ナンセンス事典』『中島らものたまらん人々』**……等々、どれにも、生きること自体のおかしさ・奇天烈さがさりげなく滲み出てくるような、独特の語り口が共通している。「文は人なり」をこれほどまでに如実に感じさせる作家は、そうはいないと思われる。

ナンシー関（2002 年没）は、その著書を私は偶然の機会から 2013 年に初めて目にして、その筆力に驚いたことから、今はその著書を、やはりまたしても 100 円文庫で収集を始めているコラムニストである。驚いたのは、**『信仰の現場 すっとこどっこいにヨロシク』**という、何かを盲信する人たちが集う現場にでかけてのレポート集で、だった。もちろん、それぞれのレポートには著者のトレードマークである「消しゴム版画」（と現場写真が数葉）が載せられている。この中のある一編が、ひょんなことから私自身が足を運んだことのあるイベントを扱っていて、その場に集った人々（主催者・奏者・聴衆）が醸すおぞましい雰囲気についていけず途中退席したその時の印象を、まざまざと蘇らせてくれるものであったからだ。「この鋭い観察眼と批評はタダモノではない」と感心して、手にした次なる本が**『記憶のスケッチアカデミー Ⅰ』『〃Ⅱ』**で、もうこれは、笑いすぎて腹が捩れ苦しくなるばかりか過呼吸になりそうな本だった。人間の記憶のあいまいさ・頼りなさ、そしてそれをよいことに身勝手な解釈や自己肯定が暴走する様をこれほどリアルに描いた本はないのではないか。その意味では、社会心理や認知認識のメカニズムを考える上での、極めて真摯で興味深い「症例」を提供しているとも言える。若くして急逝したこの人を惜しむ声は、相当に大きいのではないかと想像される。

ナンシー関の消しゴム版画の対象は、主に TV に出演する芸能人たちの「顔」であったようだが、その「顔」をテーマにしてとんでもなく面白い本を出している人に、南伸坊氏がいる（幸い、上記 3 名の作者たちとは違って、現役の方です）。その名もずばりの**『顔』**、そしてその応用実践編とも言うべきいうべき**『本人の人々』『歴史上の本人』『本人伝説』**（南氏が、あのおにぎり顔で、各界・歴史上の著名人の「本人」になりきって、顔・姿を模写するばかりか、その文体までも真似て文章を綴る）。その二作以前の**『笑う写真』**も「顔」を主たるテーマにしている。なぜ人は顔が似ていると、あるいは顔に変な所があると笑うのか？　南氏が収集したり創作したりした、爆笑を誘う「顔」サンプルから、この哲学的にも奥深い問をあれこれと考えてみるのは、なんとも楽しいひと時となるだろう。

2◆ いくつかのテーマに即しての入門書

ここでは、2013 年に読んで、感心し、学ぶところ多く、かつ非常に読みやすかった「入門書」をいくつか挙げてみたい。

・鷲巣力『加藤周一を読む』（岩波書店）、同『「加藤周一」という生き方』（筑摩書房）

今は亡き加藤周一の文業は、「入門書」を必要としないくらいに、どの著作も明快・明晰に書かれていると思うが、鷲巣氏のこの 2 つの本は、伝記的体裁をおおまかに取りながら、加藤の非常に多方面にわたる理知の活動が、どのような一貫性を持ち、それがどのような激しい心情と情熱に支えられていたかを明らかにしている。加藤の著作集の編集にあたった方にして初めて明かし得る事実がいくつもあり（例えば、遺された「一万頁を超える手稿ノート」のこと）、加藤の本を幾冊も読んできた人にも見逃せない本になっている。

・小林太市郎『芸術の理解のために』（1973 年、「小林太市郎著作集　第 1 巻、淡交社）

ごく限られた古書店か図書館でしか手に入らない本を挙げるのは申し訳ないのだが、これほど面白い講義（とそれに基づく著作）をものする大学者がいたのか、という自分なりの驚きと発見を記しておきたいので、ここに挙げる。和漢洋の絵画、建築、書、陶芸、小説や詩（西洋の詩、漢詩、和歌など）、映画……等々の名作の実例を縦横無尽に引きながら、「欲望が造形する」という芸術理論を展開するわけだが、とりあげている作品のすべてを、贅を尽くして鑑賞し熟読玩味してきたことの愉悦が、こちらに伝染せんばかりなのである。長く大阪市立美術館に務め、1963 年に 61 歳で亡くなっている人だが、晩年の 10 年間ほどは神戸大学で芸術学を講義したという。こんな「ぜったいぜつめいのたのしみ」（「序」より）として芸術に向き合ってきた碩学の講義を一度は聞いてみたかったと思う。私は急遽、古書店でこの人の著作集（全 8 巻）をまとめて買ってしまった。復刊が望まれる。

・片田敏孝『人が死なない防災』（集英社新書）
・鎌田浩毅『生き抜くための地震学』（ちくま新書）
・フロリン・ディアク『科学は大災害を予測できるか』（文春文庫）

正確には 2014 年になって読んだ本も含まれるが、市民科学研究室に新しく発足する「市民と防災」研究会の活動に関連しての入門書を挙げておきたい。防災という取り組みは、科学研究とその成果の社会への生かし方、国と自治体と個人の相互の関係性（公助・共助・自助）、予測の限界をふまえての予防のあり方、過去の教訓から何が学べるか……など、これからの私たちの生き方を問いなおす、重大でかつ興味深い問題に満ちている。これらの 3 点は、誰もが手軽に読めてしかも得るところが大きい「入門書」と言えるだろうと思う。

3◆ 作曲家・三善晃の作品

（この項の文章は、私が 2013 年 10 月 7 日に「市民科学研究室メーリングリスト」へ投稿したメールに若干手を加えたものです。）

高校時代から機会ある毎に私が、新しく発表される作品を、あるいは過去の作品の新しい演奏を、可能な限り、演奏会であるいは CD などでずっと聴き続けてきた、唯一の作曲家、三善晃さんが 2013 年 10

月 4 日に亡くなりました。

直接の面識はありませんが、演奏会でその姿をお見かけしたことは数回あります。いずれも三善さんの作品の演奏会で、エンディングの折に拍手に押されるようにしてステージに上って挨拶しておられる姿ですが、その時には私も他の聴衆に負けないように、私が 10 代の頃から素晴らしい音楽の数々を授けてもらってきたことへの感謝を込めて、本気で力いっぱい拍手してきたのでした。その人の姿をもう目にすることはできないのは、やはり悲しいとしか言いようがありません。

多くの作品をCDやネットの動画で聴くことができますが―私も発売されたレコードやCDの多くを持っていますが―でも、CD 化されていないものも少なくないので、「全集」のようなものを作るのは、これからのお弟子さんたちの仕事になるのではないかと思います。幸い、後進の育成に大きなエネルギーを注いできた人なので（長く桐朋学園大の学長をなさっていました）、これから多くの追悼文が公表されるでしょうし、追悼の演奏会も引き続き、ゆくゆくは全集が作られると思います。

多くの「三善ファン」のうちでは、なんといっても三善さんの合唱曲に魅了されて、おそらく出会ってからずっと聴き続け歌い続けることになる人たちが、一番多いのではないかと思います。三善晃が 30 代の**『五つの童画』**の斬新な響きと独特の推進力・スケールの大きさは、合唱を手がけている人に大きな驚きを与えたのではないでしょうか。（例えばその 1 曲目の「風見鶏」）

もちろんその緻密で繊細で非常に透明度の高い響きや、無駄のない構築性は、もう少し前の、叙情性を大きく表に出した作品**『嫁ぐ娘に』**の、例えば 2 曲目「あたなの生まれたのは」とか、うんと肩の力を抜いて作ったと思われるけれど、それでも完成度が高い『小さな目』（合唱の日本語がこんなにはっきりと明確に聞き取れるのは珍しいのですが、その秘密も作曲の仕方にあると私は思っています）にもすでにはっきり出ています。**『小さな目』**など、とても覚えやすいこともあって、私はいつの間にか全曲そらんじて歌うことができるようになっていました。

1970 年代にひとつの転機が訪れたと感じる人が多いでしょうが、それでも「親しみやすさも持ちつつ、その音楽性の高さで、聴き・演奏する人の精神を、深く解放された自由の次元に引き上げる」とでも言うような特質は、合唱曲ではことに顕著に持続されたように思われます。

例えば 80 年代に作曲され、おそらく戦後日本を代表する合唱の名曲に数えられるだろう、**『地球へのバラード』**の中の「地球へのピクニック」を聴いてみてください。これほど透明で、さわやかで、そして高揚感に満たされた曲は、私のこれまでのクラシック音楽の全部の体験に照らしても、見当たるものがほとんどないほどです。この曲の「ここで熱いお茶を飲もう　ここで一緒にすわって暫くの間　涼しい風にふかれよう」（谷川俊太郎・詩）という所を聴くと、さわやかな風に吹かれてそれと自分が一体になるような根源的な「生の息吹、生きていることの喜び」が自分の中に立ち戻ってくるようで、何度聴いても聴くたびに涙が出そうになります。本物の音楽の力ですね。

音楽の美を真摯にどこまでも深く追求する姿勢は、三善さんの場合、「生」の意味、理不尽な「死」とそれをもたらすものの意味を問い、「死者」は今生を享けている者にとっていかなる存在であり得るのかを、音楽によって探り続ける、という道を歩むことを余儀なくしたのだろうと思われます。

『レクイエム』（1971 年）をはじめとする三部作（**『詩篇』**79 年**『響紋』**84 年とあわせて）、児童合唱**『オデコのこいつ』**をはじめとするいくつか作品、そして最終的には、晩年の管弦楽四部作（**「夏の散乱」「谺つり星」「霧の果実」「焉歌・波摘み」**、1995 年～98 年）に結実する歩みです。彼方の世界に吸い込

まれて消えゆくような静謐さから、聴く者を圧しつぶさんばかりに呻き・叫び・咆哮する激甚さまで、オーケストラが出し得る極限的な幅を持った音表現が、そこにはあります。厳しいと言えばあまりにも厳しい、しかし同時に私には美しくもある、音楽です。

激烈といえばこれ以上激烈な管弦楽・合唱作品はないと思われる、『レクイエム』が、40 歳になる前に作曲されていることを思うと、すでにその時点で、時流にまったくおもねない、孤絶の道を歩んでいかれることを決心されたのかもしれません。この作品は、私にとって、いまだにいくつかの部分で、聴いていて本当に身体が震え出し、喉がカラカラになる、恐ろしい曲です。

私が残念に思っているのは、三善さんの唯一のオペラ『遠い帆』（1999 年）の演奏会にいまだ足を運べていない（CD もまだ出ていない）ことでした。おそらく、ここに述べたいくつかの三善さんの「側面」が融合した、そして日本の姿を見つめなおすことになる、総合的な舞台芸術になっているのではないかと推測されます。今年（2014 年）の夏に公演が予定されており、なんとしても会場に赴きたいと思っています。

三善晃さんの音楽世界への入口として何か一つを、となると大変難しいのですが、ここでは、次の CD を挙げておきます。

・日本合唱曲全集　三善晃作品集 4「クレーの絵本」（日本伝統文化振興財団）

（混声合唱曲「詩の歌」、混声合唱とギターのための「クレーの絵本　第 1 集」、混声合唱のための「地球へのバラード」を収める。指揮：栗山文昭、演奏：合唱団 OMP ほか）

● 泉 とも花

上田さんと一緒に暮らすようになって 7 年目を迎えました。
上田さんが 2013 年に見つけて買って、愛用しているようにみえる、いくつかの品を紹介します。

1◆「食」関連

10 年くらい前から味噌を手作りするようになってからは、鰹節もいつも削って使ってきた、とのこと。これまでは桐の木箱でできた削り器を使っていたのですが、2013 年からは次の道具がとって代わりました。とても削りやすくて、ササッと削って毎日お味噌汁に入れてくれるのはいいのですが、つい削りすぎてしまって、入れなくていいものにまで鰹節を入れるのはちょっと……。

オカカ

釧路に出張した帰りに航空機の機内で出たらしいスティック状の顆粒スープが気に入ったようで、まとめ買いして事務所で重宝しているようです。安いうえに確かにおいしいです。

北見オニオンスープ

ほぼ毎朝「野菜ジュース」を作ってくれるのですが、その時のベースにしているのが、100%の無塩濃縮還元トマトジュースです。以前は「カゴメのが一番うまい！」と言っていましたが、今はネットでトル

コ産の次のものをネットで安くまとめ買いしています。
【TAMEK】100%トマトジュース無塩

2◆「暖房」関連

長く使っていたチャンチャンコ（袢纏）がボロボロになってきたので買い換えようとしていた時に、「どれも結構高い……」と不満げでした。「ダウンの入った袢纏があるらしい」とどこかで聞いたらしく、ネットで次の商品を注文。届いた品は思っていたよりサイズがちょっと小さかったので、それは私のものになり、それより一つサイズの大きいのを改めて買いました。この冬は、家ではお揃いでベージュのこの袢纏を着て過ごすことになりました。軽くて暖かくて、とっても気に入っています。
男女兼用テフロン加工ダウンはんてん
事務所では足元が特に寒いらしく、暖房に湯たんぽも使っているとのこと。2013 年には「こんな湯たんぽもあるんだ」とネットで見つけたものを使っているようです。足が置きやすいからよい、とのこと。
平たい湯たんぽ

3◆「PC」関連

上田さん、久しぶりにノート PC を新調したのですが、値段の高い機種なのに DVD ドライブが付いていないタイプだったので、外付けの機器を……ということになり、「とてもいいのがあった」と見つけてきたのが、次の機種。
パイオニア　BDR-XU02JM
「付けたり外したり、PC と別々に持ち歩いたりするのが面倒」ということで、なんと PC の上蓋のところに、“超強力両面テープ”を使ってこれを貼り付けてしまいました！（上田さんは服のボタンなどもほつれないように瞬間接着剤でくっつけてしまいます。）　読み込みのトラブルなどが今まで一度も起こっていないらしくて、本人はいたく気に入っています。ちょっと高いだけあってすぐれた製品のようです。上田さんのパソコン新調に便乗して、私もノートパソコンを買ってもらいました！（ただし、上田さんの PC の約 3 分の 1 の値段……。）